The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Valle-Inclánの最後のエスペルペント『大尉の娘』について
Author(s)	堀内, 研二
Citation	Estudios Hispánicos. 1993, 17, p. 83-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93807
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Valle-Inclánの最後のエスペルペント『大尉の娘』について

堀　内　研　二

は　じ　め　に

Valle-Inclán のエスペルペントの戯曲三部作 *Martes de Carnaval*『謝肉の火曜日』の第三作 *La hija del capitán*『大尉の娘』は Valle のエスペルペントの作品のなかで最も政治的色彩の強いものである。この作品は，1913年実際に起こったサンチェス大尉の犯罪に着想を得て，1923年9月13日にプリモ・デ・リベラ将軍が起こした軍事クーデター，ならびに軍人たちがその拠り所とした祖国、宗教，君主制，家族，秩序などの概念をエスペルペント化したものと言われる。

『大尉の娘』は最初1927年7月28日発行の La Novela Mundial 誌の第72号に発表されたが、作品の政治的な意図，また，そのテーマと登場人物が何を，誰を指すか歴然としているために、すぐに発禁処分を受けることになった。

> 警察庁は政府の指示により，『大尉の娘』と題する小冊子——本発行物に著者は《エスペルペント》という名を冠している——の差し押えを行った。この上なく非常識な作り話であるために，本物件内に，公序良俗に反し，良識ある人たちを侮辱するような文章が随所にみられるがゆえである。本小冊子をごく一部なりともおおやけにするならば，政府の決定が狭量で不寛容な判断からなされたものでないことが歴然となることであろう。良俗を汚し，風紀を紊乱する結果のみを招くような本作品の発行を禁止する措

置においては，言をまたないところである[1]。

1927年の初版においては，プリモ・デ・リベラ将軍の軍事独裁政府の検閲をかわす意図のもとであろうか，Valle は作中の舞台背景を Tartarinesia という架空の国に，登場人物たちの名前もすべて外国人姓に，また，地名，街路名，団体名なども外国風に設定したが，当時のスペインの軍事独裁政府当局の検閲をかわすことはできなかった。Valle-Inclán は，カナリア諸島のフェルテベントゥーラ島に追放された Miguel de Unamuno とともに，独裁政権に反対する知識人たちの急先鋒に立っていた。

その後，『大尉の娘』はプリモ・デ・リベラ将軍の失脚直後の1930年、三部作 *Martes de Carnaval* 中の一作として再版されることになるが，この版では，すべての登場人物の名前はスペイン化され，また地名，街路名，機関・団体名などもすべてマドリードの実在のものとなっている。

さて，ここで本稿の目的について述べておくことにしよう。

冒頭で述べたように，Valle-Inclán のこの最後のエスペルペントは，スペイン現代史上のふたつの事件，サンチェス大尉の犯罪とプリモ・デ・リベラ将軍による軍事クーデターと密接な関係があると言われている。本稿では，作品とこれらの歴史的事件とがどのような関係にあるかについて考察しようと思う。さらに，この考察を踏まえたうえで，『大尉の娘』に色濃く見られる作家の軍部批判についても述べてみたい。

『大尉の娘』のあらすじ

まずはじめに，全7景からなる『大尉の娘』の内容について簡単に紹介しておこう。

舞台はマドリードのシニバルド・ペレス（別名チュレータ・デ・サルヘント）大尉の家から始まる。大尉は軍曹を殺害しその死体を兵士たちの食料としたのではないかという嫌疑をかけられていたが，アグスティン・ミランダ将軍に娘のラ・シニを愛人として差し出すことで軍事裁判での審理を免れていた。大尉の家では，将軍たちを迎えて賭けトランプが行われているが，そこにラ・シニのかつての恋人が現われる。彼は手回しオルガン弾きに姿を変え，自分の前から急に姿を消した彼女を探しまわっていたのであった。嫉妬に駆られた恋人は将軍を殺そうとするが，誤って客のひとりのドン・ホセリート（別名エル・ポリョ・デ・カルタヘナ）を刺殺して

しまう。父親と将軍を嫌悪していたラ・シニはこの機会を利用し，恋人と一緒に逃げるために家を出るが，その際死んだドン・ホセリートの財布を持ち去る。その中にはミランダ将軍の署名のある二万ペセタの借用証書二枚，返済の猶予を求めた将軍からの一通の手紙，さらにカジノ「美術倶楽部」の五千ペセタのチップが入っていた。この後，ラ・シニとその恋人は借用証書とチップを換金しようとして，故買とか恐喝といった裏の世界の仕事をするいかがわしい人物たちに相談し，結局，軍の名誉に関わるスキャンダルの情報は El Constitucional 紙の編集長に売られることになる。取り違え殺人の犠牲者ドン・ホセリートはマドリード社交界ではよく顔を知られている男で，彼の失踪についての噂が広まる。また，大尉と将軍は自分たちが手を下したものではない死体をどう処理するかという問題に直面する。危険なスキャンダルはどうしても避けなければならなかった。もし将軍がこの事件に関わりがあることにされると，将軍個人だけでなく軍全体の名誉に傷がつくことになるからだ。やがて El Constitucional 紙にこの事件をほのめかす記事が現われ，噂はさらに広がり，疑惑が深まる。新聞各社が事件解明のために報道キャンペーンを開始するのではないかという恐れが大きくなる。将軍たちはふたつの選択肢のうちどちらかを選ばなければならなかった。名誉失墜に導くスキャンダルか，中傷的な報道キャンペーンに終止符を打つクーデターか。当然のことながら後者の措置が取られる。最後の第7景では，盛装した軍や教会の上層部，民間のお歴々が駅のホームに集まり，軍楽隊の華やかな演奏が行われるなか，クーデターを承認した国王の乗る列車が駅に到着する。そして，婦人会会長が軍と将軍の行動を称える調子の高い，偽善的な演説を行う一方で，待合室にひっそり身をかくす，恋人と一緒に逃亡中のラ・シニが,「あたしのいとしいドン・ホセリート，ご冥福をお祈りするわ！まったく，あなたがくたばらなければ，祖国がくたばることになったというんだから，とんだお笑い草だわ！」(p.1094)[2]と，クーデターが安っぽいメロドラマチックなできごとの結果として生じたことをほのめかす言葉を放つなかで，このエスペルペントの幕は下りる。

以上,『大尉の娘』のあらすじを簡単に紹介した。次に，この戯曲に大きな影響を及ぼしていると言われるサンチェス大尉事件について，詳細に述べることにしよう。

サンチェス大尉の犯罪

この事件は1913年，新聞記者フランシスコ・セラノの調査によって明らかになった犯罪事件である。5月4日付の El Imparcial 紙に載った，マドリードのカジノ「美術倶楽部」の会員のロドリーゴ・ハロンという人物が失踪したという記事を手がかりに，彼は調査を開始し，ついには事件を解明する。彼のルポルタージュは，ペペ・キレスという名のもうひとりの記者の協力を得て，《Tartarín》というペンネーム(3)で España Nueva 紙上に発表された。

この事件のあらましは次のごとくである。1913年4月21日，賭博と女性に目のない五十がらみのギャンブラー，ロドリーゴ・ガルシア・ハロンという人物が「美術倶楽部」に現れ，五千ペセタをチップに替え，自分以外の者が換金にきた場合は支払いをしないようにと言い残して立ち去る。二日後，優美なブルーのフロックコートを着たグラマーな金髪の女が、そのチップを換金しに現れるが，カジノの会計係はハロン氏の言い付けを守り，支払いを拒絶する。女はそのまま立ち去る。カジノの常連たちは，ハロン氏が顔を見せなくても，いつものように別の賭博場に流連しているのではないかと考え，その不在を気にもしていない様子だったが，彼の息子がカジノにやってきて，父親が帰宅しないといってその消息を尋ねると，事態の重大さに気がついた。息子は会計係から例の女の話を聞くと，父親の失踪を警察に届け出る。ハロン氏の行方は杳としてわからなかったが，カジノのボーイが通りで偶然例の女とおぼしき金髪女性を見かけ，その後をつけ，陸軍大学校の建物に入ったのを確かめる。ボーイはハロン氏の息子に，さらに息子は警察に通報し，その結果，その女性がマヌエル・サンチェス・ロペス大尉の娘マリア・ルイサ嬢であることが判明する。しかし，警察の調べに対し，彼女は人違いだと言って強く否定し，当局もキューバでの戦いで数々の戦功があった名誉ある軍人の娘の言葉を信じたために，尋問は打ち切られ，事件はうやむやになった。ハロン氏のふだんの行動および職業から推して，彼が一時的に行方をくらましているだけで，そのうちひょっこり何事もなく顔を見せるのではないか、と警察は考えたようであった。

ただふたりの新聞記者だけは納得せず，独自の調査を行うことに決める。彼らは反教権的で反軍的な性格をもつ España Nueva 紙の事件記者で，

ひとりはフランシスコ・セラノ・アンギータ，もうひとりはホセ・キレスであった。ふたりはハロン氏がおそらくもう殺されているのではないか，また父親が軍人であるということだけで，例の女性に嫌疑がかけられないのはおかしいと考え，報道キャンペーンを開始する。彼らは証拠を探し，関係者たちの過去を調べ，大尉の娘の身持ちがそれほどかんばしいものではなく，また，ハロン氏の家政婦が失踪の少し前，二人が一緒にいるところを目撃していることが明らかになった。さらに，ハロン氏の部屋からマリア・ルイサ嬢に酷似する女性と一緒に映した写真が見つかった。

記者たちはこれらの調査結果を公表したが，あまり反響はなかった。El imparcial 紙はこの事件を最初に取り上げてくれた新聞であったが，いまでは España Nueva 紙の記者たちの扇情的なルポルタージュを手厳しく非難していた。ほんの数紙をのぞき，マドリードの新聞のほとんどは，ふたりの記事に批判的であった。

このような状況にもかかわらず，ふたりは自分たちの調査活動にますます自信を深め，新たに，あるホテルの通訳が連れこみ宿でマリア・ルイサ嬢とひとときを過ごし，彼女から父親と仲違いをしていて，二度ほど家出をしたことがあると聞かされたという事実を明らかにする。さらに，ハロン氏が失踪する前日の4月20日，彼女はホテルの通訳と会う約束をしていたが，自分の生活の面倒を見てくれているある男性に会うために Divino Pastor 通りまで行かなければならないから会えないと彼に伝えていた。そして，ハロン氏はまさしくこの通りに住んでおり，調査の結果，彼の家でマリア・ルイサ嬢が一週間過ごしていたこと，サンチェス大尉が娘をつれ戻しにきて，跪き，泣きながら彼女に懇願し，これに対し娘が「もう一緒には暮らしたくない！汚らわしくてむかつくわ。帰って，帰って，あんたのせいであたしの人生はめちゃめちゃになってしまった！」と大声で父親を罵っていたことがわかった。

しかし，ハロン氏の死体が見つからないかぎり犯罪は立証されない。ふたりの新聞記者のルポタージュはマリア・ルイサ嬢の素顔を明らかにし，その父親の名誉を貶めることにはなったが，ただそれだけであった。España Nueva 紙の意図が現体制およびそれを支持する人たちの権威を失墜させることにあるのではないかと考える者も多かった。

こうして数週間が過ぎたが，この間，ふたりの記者は数多くの批判や個

人攻撃にさらされることになった。しかし彼らは屈することなく調査を続行し，ハロン氏が彼女に会うために陸軍大学校の建物に入り，そこから二度とふたたび出てこなかったのではないかと考えるようになった。そこで軍人たちから聞き込みを行い，最近地下室か中庭でなにか工事が行われなかったか調べたところ，サンチェス大尉の居室近くの壁の補修工事が行われたことがわかった。記者たちはその壁の中にハロン氏のばらばらになった死体が埋め込まれているに違いないとの結論に達した。

ふたりに対して激しい非難がまき起こった。当局は最初彼らの主張を退け，裏付け調査をすることを拒んだが，大尉とその娘に再尋問した結果，ふたりがひどく蒼ざめ，ぐったりと肩を落としたことから，記者たちの主張を取り入れた。そして，当局による陸軍大学校内の立ち入り捜査が行われ，職人たちが壁を崩したところ，中からばらばらに切断された死体が現れ，やがてそれがロドリーゴ・ガルシア・ハロン氏のものであることが判明した。

サンチェス大尉とその娘はただちに逮捕され，真相が明らかになった。大尉がトランプをしにやってきた娘の愛人を襲い，殺害したというものだった。最初、犯罪の直接の動機は犠牲者が所持していたお金目当てと考えられたが、金やその強奪は副次的なもので，主な動機は大尉のわが娘に対する近親相姦的な愛情で，彼は激しい嫉妬に駆られてハロン氏を殺したのであった。

サンチェス大尉は陸軍刑務所に，その娘は女子刑務所に収監された。彼女は長期の懲役刑に，そして大尉は銃殺刑の判決を受けた。大尉の処刑は1913年11月3日早朝に執行された(4)。

『大尉の娘』とサンチェス大尉事件

ここでは『大尉の娘』とサンチェス大尉事件の関係について述べてみたい。先に紹介したこの戯曲のあらすじを1913年に実際に起こった軍人によるスキャンダルに照らし合わせてみれば容易にわかるように，『大尉の娘』はその構成の上でサンチェス大尉の犯罪を大いに参考にしている。登場人物のシニバルド・ペレス大尉，その娘ラ・シニ，および殺人の犠牲者ドン・ホセリートは，事件報道のなかで出てくるサンチェス大尉，その娘マリア・ルイサ，および犠牲者のギャンブラー，ロドリーゴ・ハロン氏にそれ

ぞれ対応している。シニバルド大尉は戯曲のなかで Chuletas de Sargento（軍曹の骨付きあばら肉）というあだなで呼ばれているが，これはサンチェス大尉がハロン氏の遺体を兵士たちの糧食にして処理してしまったのではないかという当時の猟奇的な憶測からきている。また，戯曲のなかの殺人の犠牲者ドン・ホセリートの好色で賭博好きという性格づけやその行状は，ハロン氏のそれを明らかに下敷きにしたものである。このドン・ホセリートは戯曲のなかでハロン氏失踪についてのうす気味悪い憶測との関連から El Pollo de Cartagena（カルタヘナの若鶏）という料理名のあだなで呼ばれている。そして，『大尉の娘』においてサンチェス大尉事件報道からの借用がもっとも顕著なエピソードが，マドリードのカジノ「美術倶楽部」での五千ペセタのチップの換金に関するものである。ギャンブラーの失踪，カジノ名，換金に現われる女性の身分，被害者所有のチップとその金額，カジノの会計でのやりとり，これらはそっくりそのまま事件報道からとってきたものと言える。

以上見てきたように，『大尉の娘』がサンチェス大尉の犯罪にヒントを得て書かれていることは明らかであるが，作者は事件の事実をそのままなぞることに終始しているわけではない。まず，大尉の娘に若い恋人を設定し，作中の殺人も父親のわが娘に対する近親相姦的な愛情からくる嫉妬によるものでなく，恋人の嫉妬によるもの，しかも殺す相手を間違えた殺人に変えている。また，アグスティン・ミランダ将軍を大尉の娘のパトロンとして登場させ，取り違え殺人から，一国の軍事クーデターが引き起こされるという筋の展開にすることにより，このメロドラマ仕立ての戯曲を痛烈な軍部批判のエスペルペント作品に変えている。なお，この点については後述する。

プリモ・デ・リベラ将軍のクーデター

この戯曲の構成の上で大きな役割を果たしているもうひとつの歴史的事件，それがプリモ・デ・リベラ将軍による軍事クーデターである。この戯曲に登場してくるアグスティン・ミランダ将軍は，1923年9月13日にクーデターを起こし，以後失脚する1930年1月29日まで軍事独裁政治を行ったミゲル・プリモ・デ・リベラ将軍（Jerez de la Frontera 1870-París 1930）をモデルにしていると言われている。

両者の関係について考察する前に，この軍事クーデターについて触れておくことにしよう。1920年前後のスペインの社会・政治状況を見た場合，弱体化した政府，頻発するテロ行為，経営者と労組の対立，モロッコ戦争に対する民衆の反感，軍部における政治および政治家批判，軍部の反議会主義および報道機関に対する反感などがその特徴として挙げられる。このような政治的，社会的な混乱が国内においてみられるなかで，1921年7月，保護国モロッコの東部地区駐留のスペイン軍が，Annual においてモロッコ解放運動の指導者アブデル＝クリム率いる部隊によって壊滅的打撃を受ける。その原因として駐留軍の士気やモラルの低下，および軍上層部の腐敗の風評が国内で囁かれ，事態を重くみた政府は1921年8月，軍事的敗北の責任の所在を調査すべくピカソ将軍を現地に派遣する。この調査は翌年の4月に終了する。1923年7月，国会はピカソ報告を審議するための調査委員会を設置した後，夏季休暇に入った。休暇が終わり国会が再開されたならば，軍や国王が責任を追求されることは必定であった。このような状況のなかで，1923年9月13日，当時カタルーニャ軍管区司令官であったプリモ・デ・リベラ将軍がクーデターを起こした。当初，将軍は軍全体の支持を受けてはいなかったが，14日，国王アルフォンソ13世が避暑先の San Sebastián から首都に戻ってきて将軍の決起を承認したことにより，このクーデターは成功した。

『大尉の娘』と軍事クーデター

ここでは戯曲のなかのミランダ将軍とプリモ・デ・リベラ将軍の関係，および，作中のクーデターと実際のクーデターとの関係について考察してみたい。

まず，作中の将軍と実在の将軍の関係について見てみよう。ミランダ将軍がその気質，性向，さらには思想に至るまで，歴史上の将軍をモデルにしていることは，Rodolfo Cardona と Anthony N. Zahareas がその共著 *Visión del esperpento* のなかで明らかにしている。以下，同書を参照しながら，両将軍について述べてみたい。両者に共通した特徴として，政治および政治家に対して抱いている不信が挙げられる。ふたりとも，国会議員や愛国心のない者たちがスペインをだめにしてしまったので，祖国を再建するためには犠牲的行為が必要だと考える。また，彼らは感傷的な愛国

主義者で，十字架，国旗，母，祖国，息子たち等といった心をゆさぶるような言葉を好んで用いる。ふたりともアンダルシア人で，闘牛やお祭り騒ぎが大好きで，ギャンブル好きで，好色である。その一方で，祖国の救い主としての体裁を保とうとする。また，ふたりは美辞麗句や大言壮語を用いる人でもある(5)。

作中の第6景でミランダ将軍が決起にのぞんで用いている次のような言葉に注目してみよう。《このままだと大混乱が起こる》(p.1087)、《私は軍が政治に関与することにはこれまで常に反対だった》(p.1087)、《私は国家に対して声明書を起草しようと思う》(p.1088)、《私は祖国と宗教と君主制のためにこの身を捧げようと思う》(p.1088)、《私は愛国主義者で，体制に対する愛だけが私の心を動かす》(p.1088)、《私を導くのは野心ではなく，スペインへの愛である》(p.1088)、《門外漢の男がフェルナンド聖王の玉座を救うことになるのです！》(p.1088)、《私の今後の人生はこのカードにかかっている》(p.1089)、《今夜は政府の最後の夜となるだろう》(p.1091)。プリモ・デ・リベラ将軍はその執政時代に，自らの政策決定についての政治的動機を説明するメモを書きしるす習慣があり，それを翌朝の新聞に掲載させたりしていたという。作者 Valle-Inclán にとって，そのメモからの表現を借用することは至極簡単なことであり，上記の言葉はこうしてミランダ将軍の口に移し替えられているようである。ちなみに，第7景において，サン・ビセンテ婦人会会長，赤十字婦人会会長などの肩書きをもつドニャ・シンプリシアが行う仰々しく，調子ばかりが高い演説も，プリモ・デ・リベラ将軍のメモに現れる愛国主義的な修辞からの *pastiche* と考えられている(6)。

> 国王陛下，スペインの女たちにとって祖国の苦難は決して他人事ではありませんでした。私たちはテレサ・デ・ヘススやマリア・ピタ，アグスティナ・デ・アラゴンやマリアナ・ピネーダの娘です。私たちはあのひとたちと同じ思いで，あの清純な心を引き継いでおり，私たちの栄光ある軍が着手した維新を心から支持しております。最高司令官がその勝利の剣をかかげられ，その輝きはスペインの母親たちの心をいっぱいに満たしました！私たち家庭の天使は、このか弱き声で軍政をたたえる歌を共にうたいます。陛下，私たちは声を合わせ，王家の母である教会の祝福によってゆるぎないものになった，熱烈な祈りと心の底からこみあげる思

いとを捧げます！その昔，サラマンカの学生がその意中の婦人の通り道に破れマントを敷いたように，私たちは陛下の通り道にこの心を敷きつめます。この心は陛下のものです，どうかお取りください！王権を神授されている陛下は祖国の栄光のすべてを象徴し，体現されておられます！カルデロンがどう言おうと[7]，陛下に対しこの心を差し出すことをどうして拒みましょうか？(p.1093)

次に，戯曲中のクーデターと実際のクーデターの関係について考察してみたい。プリモ・デ・リベラ将軍が決起するにいたる主な動機としては，前章で触れたように，Annual における軍事的敗北の原因に関するピカソ報告が，国会の調査委員会によって審議されるのを阻止しようとしたことが挙げられる。これに対して，ミランダ将軍らがどのような意図のもとにクーデターを計画したかというと，その直接のきっかけは，実際には自分たちが手を下したものではない殺人，しかも嫉妬からくる取り違え殺人といった馬鹿馬鹿しい事件によって，軍と将軍自身の名誉が危うくなったためである。このように，厳粛であるべき行動が，作品のなかでは，くだらない動機に誘発されて行われることになる。もっとも，軍事クーデターなどというものは，厳粛で真摯な動機によるものであろうがなかろうが，決して容認しうるものではないが。そして，まさにこのことが，作者をして，このような痛烈な軍部批判の戯曲を書かしめたと言える。

軍部批判（結論にかえて）

筆者は先に発表した論文のなかで，*Martes de Carnaval* 中の一作『死者の晴着』にみられる作者の軍部批判，および物質至上主義批判について考察した[8]。軍部批判は『ドン・フリオレーラの角』を含む，*Martes de carnaval* 三部作すべてにおいてみられるものであるが，この傾向は『大尉の娘』において特に顕著である。それはとりもなおさず，前章で述べたように，サンチェス大尉の犯罪という軍のスキャンダルと軍事独裁政権のもとになった〈厳粛な〉クーデターを組合せて Valle がこの戯曲を作り上げていることに拠っている。特に最終景において、ドニャ・シンプリシアが軍の決起を歓迎する，調子の高い愛国的な演説をおこなった直後，その偽善性を嘲笑うかのように，ラ・シニに「あたしのいとしいドン・ホセリート，ご冥福をお祈りするわ！まったく，あなたがくたばらなければ，祖

国がくたばることになったというんだから，とんだお笑い草だわ！」という例のセリフを言わせ，クーデターが崇高な目的のためではなく，実際は嫉妬による取り違え殺人といったメロドラマめいた原因によって引き起こされたことを示すことにより，〈神聖な〉軍の威信は大いに貶められている。

次に，華やかな歓迎のなか，マドリードの駅に到着した国王の描写を見てみよう。

> 国王は列車の窓から頭をのぞかせ，下唇の突き出した笑みを浮かべ，脂ぎった仮面をゆがめ，田舎者のような悪戯っぽい目を教理伝道教団を代表する婦人たちに向けた。演説が終わると気さくに拍手をし，そのミミズのような長身をのりだし，うつろな響きをもつ声で言った(pp.1093-94)。

このエスペルペント特有の手法による描写は，前章で挙げたドニャ・シンプリシアの軍と国王を讃える演説の後にみられるが，Valle-Inclán は軍部のクーデターを承認した国王をこのように戯画化し，低劣化することで，国王を戴いてクーデターを決行した軍そのものを批判していると考えられる。

また，軍関係の登場人物の性格づけにしても，シニバルド・ペレス大尉は，自らにかけられた殺人の嫌疑をかわすためにわが娘を将軍の妾に差し出し，また，わが家で賭博場を開帳し，ギャンブル好きな将軍の機嫌をとるというように，唾棄すべき人物として描かれている。また，ミランダ将軍は作者が批判の矢を向ける的の中心とでもいうべきプリモ・デ・リベラ将軍と二重写しにされ，そのギャンブル好きで好色な性向が強調されている。ここにミランダ将軍についての描写を引用しておこう。

> 酔って赤らんだ顔をほころばせながら，ズボンのボタンを掛け忘れたペリキート・ペレスの征服者[9]はその肥満した体を上げる。太鼓腹で，サトゥルヌスのようで，闘牛とお祭騒ぎの常連で，葉巻好きで，鐘楼のような体軀からいつもアルコールの匂いを放ち，快活で，多弁で，好色な男，ラ・シニバルダのパシャは両腕を広げる(p.1068)。

さらに，彼らの資質を最大限貶めるために，作者は彼らに隠語や下卑たやくざ言葉で話させている。これは Valle-Inclán のエスペルペントの作品に常套的に用いられている手法である。社会の上層階級の人たちにこの

種の言葉を話させることにより，彼らを戯画化し，その品位を下落させ，それでもって彼らの批判を行うのである。

以上の考察から，Valle-Inclán の最後のエスペルペントがスペイン現代史上のふたつの出来事，サンチェス大尉事件とプリモ・デ・リベラ将軍のクーデターとどのようなつながりを持っているかが明らかになったのではないかと思う。『大尉の娘』とふたつの歴史的事件をパラレルに見ることによって，スペイン現代史のある時期がより身近に理解できるとともに，この作品および作者の意図がより鮮明になったのではなかろうか。

〔註〕

1）Rodolfo Cardona y Anthony N. Zahareas : *Visión del esperpento. Teoría y práctica de los esperpentos de Valle-Inclán,* Editorial Castalia, Madrid, 1982, pp. 197-198.

2）*La hija del capitán* のテキストには Ramón del Valle-Inclán : *Obras Escogidas I,* Aguilar, Madrid, 1974を使用。以下カッコ内のページはこの版からの引用箇所を示す。

3）ふたりの記者はこの名称を Alphonse Daudet の作品中の主人公 Tartarin から借用していると思われるが，Valle-Inclán は *La hija del capitán* の初版（1927）において，検閲をかわすために，このペンネームに拠ってその舞台背景を Tartarinesia という架空の国にしている。

4）この章の記述には Manuel Aznar Soler : *Martes de carnaval, Ramón del Valle-Inclán,* Editorial Laia, Barcelona, pp.88-93 を参照。)

5）Rodolfo Cardona y Anthony N. Zahareas, *op. cit.,* pp.208-209.

6）*Ibid.,* pp.209-210.

7）Calderón の *El alcalde de Zalamea,* jornada I, escena XVIII 中の Pedro Crespo の有名な言葉，“Al rey la hacienda y la vida / Se ha de dar ; pero el honor / Es patrimonio del alma, / Y el alma sólo es de Dios” を指す。Sumner M. Greenfield : *Valle-Inclán, anatomía de un teatro problemático,* Editorial Fundamentos, Madrid, 1972, p.289 参照。

8）拙稿「Valle-Inclán の『死者の晴着』にみられる批判精神について」Estudios Hispánicos, Vol.13, 大阪外国語大学，1987を参照されたい。

9）作品のなかで，ミランダ将軍は El Vencedor de Periquito Pérez とか El Pachá Bum-Bum とかというあだ名で呼ばれている。Periquito Pérez は19世紀のキューバの愛国的な軍人 Pedro Agustín Pérez のこと。

〔参考文献〕

Don Ramón del Valle-Inclán : *Obras Escogidas I,* Aguilar, Madrid, 1974.

Rodolfo Cardona y Anthony N. Zahareas : *Visión del esperpento,* Editorial Castalia, Madrid, 1982.

Sumner M. Greenfield : *Valle-Inclán, anatomía de un teatro problemático,* Editorial Fundamentos, Madrid, 1972.

John Lyon : *The theatre of Valle-Inclán,* Cambridge University Press, Cambridge, 1983.

Manuel Aznar Soler : *Martes de carnaval, Ramón del Valle-Inclán,* Editorial Laia, Barcelona, 1982.

Manuel Bermejo Marcos : *Valle-Inclán : introducción a su obra,* Anaya, Salamanca, 1971.

Emilio González López : *El arte dramático de Valle-Inclán,* Las Américas Publishing Company, New York, 1967.

José Pérez Fernández : *Valle- Inclán (humanismo, política y justicia),* Editorial Marfil, Alcoy, 1976.

Joaquín Casalduero : *Estudios sobre el teatro español ; Sentido y forma de "Martes de carnaval"*, Biblioteca Románica Hispánica, Editorial Gredos, Madrid, 1972.

Francisco Ruiz Ramón : *Historia del teatro español Siglo XX,* Ediciones Cátedra, Madrid, 1975.

Raymond Carr : *España 1808-1975,* Editorial Ariel, Barcelona, 1982.

M. Teresa González Calbet : *La dictadura de Primo de Rivera. El Directorio Militar,* Ediciones El Arquero, Madrid, 1987.

Stanly G. Payne : *Los militares y la política en la España contemporánea,* SARPE, Madrid, 1986.